

## 求菩提のやまんば

むかしむかし、古いばあさまに聞いた話じゃが、求菩提の山おくにはやまんばが住んでおったとい  
う話じゃ。

やまんばちゅうんはな、かみは白くてこしの辺りまでぼさぼさと伸びておって、目はぎよろりと大  
きゆうて、その目にくらまれるとかみなりにうたれたみたいに金しばりにあうという話じゃ。それに、  
口は耳元まで切れあがっておって、鬼みたいな顔をしちよるおばばのことじゃ。歳？そうじゃな、百歳  
はこしとろうかの。こしは曲がっておるが、足は丈夫で千里かけめぐっても息切れせんというつわさ  
じゃ。やまんばは山おくで草の根、木の実を食べて暮らしちよるんじゃが、泣き虫で弱虫の子ども  
いたずら小僧が好物で、見つけるとどこまでも追いかけてつかまえて食べるそうじゃ。

そのやまんばの住む山のふもとに、小さな山寺があつ  
た。その山寺には、和尚さんと小僧さんが二人で住んで  
おった。小僧さんは、ちいつとばかり弱虫で、ねずみが  
ガタツといわしただけでも、和尚さんのところにとんで  
くる。夜なんぞ出歩くなってもつてのほかじゃった。和  
尚さんが少しでも強くなるように仕向けても、なかなか  
じゃった。小僧さんも強うなりたいたいと思つておつたが、  
こればかりはどうにもならんと自分であきらめておつた。



求菩提山

さて、秋の彼岸が近づいたある日のことじゃ。和尚さんが小僧さんと呼んで言うた。

「これ、小僧さん。そろそろ彼岸じゃ。仏壇に供える花をつみに行ってきておくれ。」

「えつ、和尚様、今からでございますか。少々心細うございます。」

「そうじゃな、心細いか。じゃが、わしは檀家回りに出かけねばならんからな・・・」

和尚さんは、少々思案しておったが、おもむろに仏壇に参ると三枚のお札を取り出して小僧さん  
手わたして言うた。

「ここに、三枚のお札がある。もし何かあったら、このお札に願いごとを言うてたのむがよい。必ず  
お前を守ってくれようぞ。安心して花つみに行ってくるがよい。」

そう和尚さんに言われた小僧さんは、やっと安心して花つみに出かけた。山のふもととは辺り一面、  
彼岸花がさき、まるで赤いじゅうたんをしきつめたようじゃったそうな。小僧さんは気分よく鼻歌な  
んぞ歌いながら歩いて行つた。

ところがじゃ。野山を歩いてても歩いてても、仏様に上げられそうな花が見当たらんのだ。小僧さん  
は山のおくへおくへと歩を進めておるうちに道に迷つてしもつた。日も暮れかけ心細うなつてきた。  
小僧さんは、胸元のお札をぎゅつとにぎりしめた。と、その時、目の前に一軒の小屋の明かりが目  
に入った。願い事を言うのをやめ、その小屋で一晩とめてもらうことにした。

「もしもし、どなたかおいでますか。道に迷つて困っております。一晩とめていただけませんか。」  
すると、戸がするりと開いて中から美しい女の人が出てきた。

「まあまあ、さぞお困りでしょう。何もありませんが、どうぞお入りください。」

小僧さんは、女の人の優しそうな声に安心してとめてもらうことにして中に入った。女は、戸をしつかり閉めると囲炉裏に案内し、小僧さんにかゆをすすめた。小僧さんはおなががすいていたことを思い出して、腹いっぱいすすった。そして、女にすすめられるままにとこについた。

さて、どのくらい時間がたったのじゃろう。しゅうつ、しゅうつ、という音で小僧さんは目を覚ました。うす明りの中を音のする方へ首を回した小僧さんは、あつと声にはならない声をあげた。戸のすき間から見えたのは、美しい女ではなかった。目はぎらぎらとかがやき、耳元までさけた口からはよだれも落ちていた。

「そろそろいいあんばいかの。」

と言つて、手元の包丁の切れ味を試す女は、まさしくあのうわさのやまんばだった。小僧さんは、がたがたとふるえが止まらず、かといってにげ出そうにも体が動かない、そうじゃ、それが金しぼりちゆうもんじやろうか。とその時、小僧さんの気配に気がついたやまんばは、

「目が覚めたかい。お前の様な弱虫でおくびような小僧は、わたしには最高のごちそうだよ。特にその心の臓を食つと百年は長生きできるんじゃないよ。待つておいで。もう少しで用意ができるからね。」

小僧さんは、自分が食われようとしていることが分かつて、にげ出そうとした。ところが、足こしがようたたんで、すぐやまんばにつかまってしまいなわでくくられてしまった。もうおしまいと思うたが、目を閉じて念仏を唱えた。すると、和尚さんが目の前に現れて、

「お前は弱虫なんかじゃないぞ。よく思索してみよ。」  
と小僧さんにほえんだ。

体のふるえが止まった小僧さんは、ぐうんと背のびし、やまんばに言った。

「もうし、もうし、せつちんに行きとつごいしますが、ここでもらしては悪いと思いますが・・・。」  
やまんばは、よごされてはかなわないと思い、なわをゆるめ小僧さんのこしに結び直して連れて行った。そつそつ、せつちんは、便所のことじゃよ。小僧さんは、せつちんに入ると戸をしっかり閉め、こしのなわをほどくと柱にくくりつけた。柱に一枚のお札をはり、たのんだ。

「お札よ、お札。私の代わりに返事をしておくれ。」

小僧さんは、小窓からするりとぬけ出すと、一目散にかけ出した。

「まだかい、小僧。」

いつまでたつても出てこないの、やまんばは声をかけた。すると、中から小僧さんの声がした。  
「まだでございます。少々お腹をこわしたようでございます。」

まな板の用意もでき、やなぎのはしもけずり終え、しびれをきらしたやまんばはなわを強く引いた。  
「あつ。」

なわの手ごたえがちがうのにあわてたやまんばは、急いでせつちんの戸を開けた。小僧がいない。おこつたやまんばは、柱にくくられたなわを引きちぎりくやしがり、急いで外に出ると、小僧を追いかけた。すると、かなたのおかをかけていく小僧が見えた。

「まてえ。小僧。」

やまんばの声に、小僧さんはふり返った。かみの毛の一本一本は、ひびのとくゆらめき、あやしい光さえ放ちつつ追いかけてくるやまんばの姿は、すさまじいものじゃった。やまんばの気におさねな

がらも小僧さんは夢中で走った。

もう少しで追いつかれそうになったその瞬間、小僧さんは二枚目のお札を取り出すと、やまんばに向かって投げた。

「お札よ、お札。山になれ。大きな大きな山になれ。」

すると、小僧さんの後ろに大きな大きな山ができた。しかし、やまんばもさるもの。大きな大きな山もなんのその。

またたくまに小僧さんに追いついた。

小僧さんは、三枚目のお札を取り出すと、また、やまんばに投げつけた。

「お札よ、お札。川になれ。大きな大きな川になれ。」

すると、小僧さんの後ろに大きな大きな川が現れた。しかし、

やまんばもさるもの。とつとつと流れる川を前にして、ひるむことなく川の水を飲みだした。ぐぐつ、ぐぐつ、その飲みっぷりはすさまじいものじゃ。あつという間に川は干上がってしもつた。

しかし、あわや、というところで、小僧さんは寺にかけこんだ。ただことならぬ小僧さんの様子にすべてを察した和尚さんは、山門を固く閉め、小僧さんをおくにかくした。

くるったようなやまんばは、寺にやってきた。山門もあつという間におし開け、和尚さんが止めるのも聞かずどかどかと入りこんできた。

「おい、小僧。かくれてもだめだつ。ここだなつ。においがするつ。」



と、小僧さんがかくれている井戸のところによつてきた。

「見つけたぞっ。こんなところにしたのかっ。つかまえてやる。」と、井戸の中を見たやまんばは、勢いあまって井戸の中へ真っ逆さまに落ちてしまったということじゃ。

えっ、小僧さんかの。もちろん無事じゃったよ。小僧さんのは、つるべの上にしがみついちよったんじゃ。やまんばは、井戸の水に映った小僧さんを追っかけていったんじゃな。

和尚さんは、井戸にすっかりふたをして、お札でふう印したそうじゃ。それから、やまんばに出会ったもんはおらんちゅうことじゃから、死んでしまったんじやるうのう。小僧さんは、和尚さんにお札のお札を言ったそうじゃが、和尚さんは、

「お札の力もあるうが、小僧、お前の知恵と勇気があればこそ、助かったのじゃ。おまけに、お前は、やまんばを退治したんじゃよ。もう、弱虫なんかじゃないぞ。弱虫と思うなよ。」

それから、小僧さんはお勤めにはげんで、みんなにしたわられるいいお坊様になったということじゃ。

この時できた山が求菩提山で、流れた川が岩岳川だと言つ人もおるそうな。

